

溺れる

朝比奈富美男（大豊町）

私は不覚にも
水平線を吞込んだ
咽喉を突き抜けた水が
矢となり槍となる
烈しい嘔吐は止まらない
伸びたり縮んだり丸くなったり
着地点を見出せないまま
私は中間に浮かんでいる

「私は不覚にも／水平線を吞込んだ」がいい。たぶん、溺れる瞬間は水平線を呑み込むといった感覚なのだろう。詩を読むということは、あたらしい体験をすることでもある。溺れたことのないぼくにもその感覚が伝わってくるこの二行はいいなあとおもった。しかし、咽喉を突き抜けた水が「矢となり槍となる」はどうだろう。せつかく出だしがいいのだから、ここは肝を

息は殺され
意識は水に溶けて行く
大小の美しい泡
何も聞こえない

ここは何処

水浸しとなった肺臓は漂い
幽霊船の甲板に佇む

私は巨魚の口の中を覗いている
吸い込まれているんだ
もう逆えない

据えて身体しんたいの異変についての表現を工夫してほしかった。最後の三行の締め方がいい。「巨魚」をどう読むかは読者のひとたちそれぞれだろうが、ひとはときどき「もう逆らえない」までに追い込まれることがある。溺れるときがある。

わたしが居場所をさがしたばたする日

雨宿り（高知市）

わたしは街のなかをひとの流れに逆らいさまよい歩いた。わたしという存在の、捨てられた空き缶が響き缶がころがり響きたつようで、わたしはまわりの目を気にし、一日かけだれもない山にやってきて、ようやく安堵の吐息をもらす。

雲がわきたっている。わたしのいる岩峰にもその触手がのびてくる。もうすぐ峰をのみこんでしまう。尾根に立つ一本の木がうらやましい。たしかな自分の立つ場所をもっている。わたし

の場所はどこにあるのだろうか？雲のうえにも山のなかにもないことはわかっているのに、わたしはいつもやってきてしまう。まだ空には一日の光のこっている。雲霧とともにつめたい風が流れ、谷には夜の闇がひろがる。雲のなかにわたしの影がうつっている。どこにも居場所はみいだせないけれど、ここには息をつく安息だけはあるのだった。

世間という他者のなかで雨宿りさんという存在は捨てられた空き缶が響いているだけのような虚しさを感じている。そんな雨宿りさんはだれもない山（雨宿りさんの居心地のいい自我の懐）にたどりついてようやく安堵できるのだが、その自我という避難地も「わたしの場所はどこにあるのだろうか？」という疑問形でしか存在できない。ひとはきつと、十代には十代の、

二十代には二十代の、そして六十代には六十代の自分の居場所をさがして、おろおろと、それでも見た目には豁然とした姿形をととのえて生きていきたいとおもっているだろう。ほくは雨宿りさんより年上だが、まだじたばたしている。年寄りのじたばたもけっこう楽しい。

筆名が消えていく

囲碁僧（高知市）

うしろ暗いところはないが
「多分にうさんくさいが」

周囲からどんどんとペンネームが消えていき
本名実名ありのままの自分が求められ
筆名が偽名になったかの様相

脱税でもする気ですか
知られたくない秘密があるからですか
それとも理由がほかに

戸籍に記されている本名は国家という制度に組み入れられた一種の記号のようなもので、そういう制度的な記号ではなく、みずからのおもいをたくした筆名をつかって表現活動をしていると囲碁僧さんはおもっていたが、筆名が消えていく。それは「本名実名ありのままの自分が求められ」ているせいだと囲碁僧さんはいっているが、「ありのままの自分」とはなんだろう。そ

映画ではスパイだってジェイムズ・ボンドと
本当の名前をさっちり明かす
「身分は隠したままだが」

公明正大堂堂とした振舞よりは
筆名は陰でこそそそくしく印象

ごめんなさいと平身低頭
いっそのこと私のすべてを吐露したら
私は誰からも好かれるのですか
格好悪いだけではないですか

のへんを書いてみてはどうでしょう。
なお最近筆名どころか本名実名まで
無視されて、ただたんに数字の組み合
わせで表記されようとしている。

時代

石川 志津（土佐市）

本は 本で読む

写真は アルバムで見ると

電話は 場所が繋がる

そして手紙は

人の手によって伝わる

ワタシの時代だった

全てがヒトツの光に絡まれて

最近も、本も写真も電話も手紙も、

ひとつのタブレットのなかでことたりるようになってきた。便利である。物心ついたころからそういう生活になじんでいるひとは「便利」という言葉すらなく、それが「普通」になっている。しかしそのことに違和感を感じるひともいる。ひとの習慣というものはおそろしいもので、本は書籍で、写真はプリントで、電話は固定電話で、便り

次世代とやたらに浸かった今も
ワタシは生きてる

箱庭の交流の瞬きに

吐き気を押し戻して

目眩を堪え

縫い目の無い夜を眠る

薄れゆく時の息が

朝を紡げる様に 祈りながら

は手紙で、とそのように育ったひとにはいまの便利さが吐き気を催し、めまいを覚え、縫い目のない夜（生活のなかでメリハリ、アクセントをつけて生きていくことができない日々）を眠れ、といわれることにひとしい。それでも時代はひとの手に余る便利さを求めて先へ先へと進んでいく。文明は物理的な豊かさとして引き換えに、ひとになにを捨てて生きていくことを強要しているのだろう。

のぞきからくり

いそえまちこ（高知市）

子どものころ

夏祭には「のぞきからくり」があり

見物人がたくさんいた

小さな舞台の両側に

おじさんとおばさんが竹の棒を持ち

舞台の床を打ち鳴しながら

調子をつけて歌っていた

舞台下にレンズがズラリと並び

お金を払えばレンズを覗き見れる

レンズの中は立体的に見える

大きな芝居絵が物語の順に変わってゆく

終りに客寄せの口上を述べながら

看板絵の両端を開くとパノラマになり

見物人は「おう！」

毎年 同じおじさんとおばさんだった

伝承文化とはいえないかもしれないが

「のぞきからくり」は消えてしまったか

のぞきからくりの世界は異形の世界である。ひとびとが日々の暮らしのなかで背負えないもの、唾棄したいもの、殺意をもつもの、これはたしかに自分だが自分とは認めたくない、そんなふらちな考え、そういう異形をレンズのむこうのちいさな箱に収めてひとびとは清廉潔白という邪気をかぶった日々を生きているのだが、ときどき、悪意ややつかみや憎悪がわいてくるときが

ある。そんなときはガラスのなかに閉じ込めた自分に会いに行く。そんなふうにしてのぞきからくりは存在する。しかし、いそえさんはこどものころのたんなる郷愁として懐かしんでいるだけで、おとなになつたいそえさんにどんな異形の世界があるのか、そこまで書かなければ詩にならない。

縁台にて

井上 孝(いの町)

縁台にごぎを敷き どかっと坐ると
とりどりの花からの いらっしやいませ
ごくごくつと ビールを飲み干し
心地よい疲れを 五臓六腑に流し込む
鉢巻を締めた蟻たちが かけ合いながら
大切な荷を せせと運んでいる
ぽっかり浮かんだお月さんが
急ぐ鳥の 家路を につこり照らしている

最近はまだ縁台は見られなくなつたが、昭和の時代は夕涼みと称して露地に縁台が並んだ。隣近所のおとなが集まり、将棋を指したり、酒を飲んだり、と一種の社交場だつた。今宵、井上さんは縁台でビールを飲みながら、夕暮れていく風景のかずかずを楽しんでいる。世知辛い世間をこうしてゆつたりとわたっていくのはもう世界遺産級の楽しみである。猫のリッキーもスフイ

ンクスを気取って井上さんを楽しませて
てくれている。

遠くで 子どもたちが 夕空に飛んでいる
もういいかい もういいかい まあただよ
もういいかい もういいかい もういいよ
ああ ここは 私だけの世界遺産

猫のリッキーさんが 散歩から帰ってきた
縁台に ひよいと飛び乗ると
私のとなりで スフインクスになった

旅

大江 碧 (高知市)

旅をしているつもりはないのに
昨日の私と 今日の私は違う
細胞の何分のいちかが生まれ変わり
髪の毛の本数すら違っている
私と言う時間の上を
抗えないスピードで
私は私と旅をしている
周りの景色も 人も

ひとの細胞の数は37兆個といわれていて、それらは日々細胞分裂を繰り返している。だから俗に、ひとの細胞は半年で入れ替わるといわれている。大江さんはその細胞分裂を旅にたとえて身体からだだけではなく、大江さんのころという不可解な領域も細胞分裂をおこしていて、古いわたしから新しいわたしへと旅をしているわたしという存在を見据えている。いや、そうではな

それぞれに 旅をしているのだけれど
何も 誰も 気が付かない
無意識の海の中で
旅をしているつもりはない私が
毎日 少しずつ 溺れて行く様子を
空が 黙って見ている

いかもしれない。つねに受動態であるわたしの旅は、日々のよしなきごとに翻弄ほんろうされながら旅しているわたし、細胞分裂しているわたし、というわたしの旅を空(=この空がなんの喩なのかは読者の数だけある)が黙ってみていく。そういう空の存在がわたしを励ましてくれていること、わたしは今日、溺れながらも生きていけるのだ。